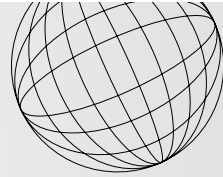


世界をみつめて3

メディア

元山 千歳



山の麓で生まれ育った母は、嫁いできた当時の思い出話に、波の音がうるさくて夜眠れなかった、などと幼いボクによく話した。すでに母は他界しているが、ぼんやり、岩に砕ける波飛沫を見ていたりすると、すーっと、そんな母の風景が思い出されるときがある。海のきわにあった嫁ぎ先には舅や姑がいて、居心地が悪かったのだろうか。

母には、ただの質量にしかすぎない波も、舅姑の小言のように聞こえたのだろうか。波や岩も、コミュニケーションの場であって、それぞれ固有の意味になってしまう素朴な形態のメディアなのだから。

時は流れ、というボクにも中高生時代ってのがあったんだけど、今日のマルチ時代にくらべると極端にメディアの種類はすくなかった。それでも青春時代だったわけで、というも交換日記の感触かなんかをまるで今時のことのように思い起こすからだ。クラブ練習で、身も心もヨレヨレになって、自転車置き場へ足を運んでいると、女性の手が、ふっと、風になって日記をさしだしてくる。それはもう、ウェブサイトにある交換日記なんかじゃなくて、触れてワクワクする物質的なメディア装置だった。

ところで今日の日刊紙の始まりは1870年の『横浜毎日新聞』だそうだが、ボクなんかは、〈新聞〉といえはすぐに、紙に印刷されたメディアを想定する。〈新聞〉はインターネット上にもあり、広告収益などをめぐって問題はこれから増えつつあるだろうが、ボクらは日々、〈質量=紙、生地など〉や〈装置=インターネット、テレビ、映画など〉に関わる現実のなかで生活を構築している。なるほど、文化ってメディアなんだ、と思いこんでしまっても不思議ではない時代を生きているのだけれど、こんな時代だから、〈システムとしてのメディア〉にもっと意識的になってもいいのかも知れない。

7月4日が、アメリカで特別な意味があるとなれば、それは独立記念日だからにちがいない。それぞれの地域や家庭によって受け入れ方は異なるだろうけれど、というもこの日は歴史的

民族的にいささか複雑だからで、しかしそれにしても、いま滞在中のバークレイに記念日らしさは見えなかった。サンフランシスコの観光地として知られるフィッシュマンズ・ウォーフのピア39などで、月並なバンド演奏があったり、夜の9時半頃に花火はあがったが、独立記念日を特別に表象するモノを、街並に見ることはほとんどなかった。

予想していた通り、夜11時のテレビ・ニュースは花火風景を放映し、翌7月5日付けの新聞『サンフランシスコ・クロニクル』(SFC)は第一面に花火の写真と、星条旗の小旗を手に星条旗ハットをかぶった女の子を抱く星条旗ハットの父親の写真を掲載した。記事は、アメリカ各地で、それぞれの仕方で7月4日を祝った、というような内容だった。

おそらくある地域で、ある団体や家庭で、7月4日は盛大に祝福されただろう。しかしバーゲンセール程度にしかこの記念日が理解されていないこともまた事実であるにもかかわらず、7月4日の意味を伝えるために必要な事実を各地から集め掲載しているとしたら、それはSFCがマス・メディアの担うべき役割として、つまりちょうど国家統一の役目を担いはじめた1830年代の新聞メディアがそうだったように、事実だけではなくイデオロギーを報道しているからだ。

このとき新聞は、質量であり、装置であり、なによりもシステムとして働いている。もしそれがシステムなら、そこにはわれわれの身体もまたメディアとして、星条旗模様のハットをかぶった親子のように、構造的に組み込まれている。

古い古い時代、神殿を背景にして、臣民にむかって朗々と読まれたパピルス文字が神託として畏れられ受け入れられたように、メディアは、システムを機能させる中枢にあり、ボクらの身体もまたメディアとしてあることに、今日ことのほか意識的であってもいいのではないかと、つくづく感じてしまう時代を生きているのかも知れない。

もとやま ちとし(教授・アメリカ文学)